

第28回全国読書作文コンクール対象図書

【小学生の部】



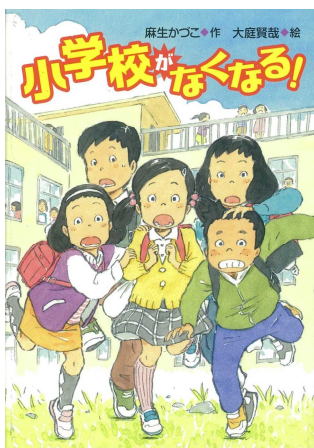
図書名 となりの猫又ジュリ

金治 直美 著 定価1404円(税込) 国土社

月の明るい夜のことだった。飼い犬のチャルは、鼻の先がピリピリと熱くなって、夜中に目を覚ますと、となりの家の屋根の上で、猫のジュリが体中の毛を逆立てて、気持ちよさそうに月の光を浴びていた。まっ白な毛並は銀色に輝き、体は大きくふくらんで、2本に分かれた長いしっぽをくねくねさせている！ いったい何をしているんだろう？ ジュリと出会ってから、チャルのまわりでは、ふしぎなできごとが続いていた。ガイコツ犬にしがみつかれて、ドッグランに行くことになったり、光を放つハムスターに泣きつかれたり、闇のようにま

っ黒なかげに、さらわれそうになったこともある。

ジュリは、迷える魂を空の国へ送り届ける使命をはたす猫又だった。だが、わけあって猫又となったジュリには、深い秘密があった……。いつしかチャルも、ジュリの手助けをすることに！ 猫又ジュリとチャルの、ふしぎで温かな親愛と友情の物語。



図書名 小学校がなくなる！

麻生 かつこ 著 定価1296円(税込) 文研出版

昨今の児童生徒数の減少は、山間部や農村部の小中学校だけでなく、都市部の小中学校でも大きな影響が出ています。とりわけ小学校は、学級数の減少や学年単学級になるケースが増えてきました。それらの小学校では、児童数の減少が続くと、近隣の小学校との統廃合が現実となります。自分の通っていた学校がなくなる！お父さんやお母さん、お兄ちゃんやお姉ちゃんが卒業した学校がなくなる！そのことを受け入れる気持ちは、どんな気持ちなのでしょう？通っている小学校は、自分の家にいる時間と同じぐらい、長い時間を過ごす場所です。登場

する主人公と友達たちは、今通っている小学校への深い愛着と、これから始まる新しい学校生活に対する不安と期待の気持ちでいっぱいです。通っている「小学校がなくなる！」という出来事を通じて、成長していくみんなのすがたを感じてください。

図書名 ジャンケンの神さま

くすのき しげのり 著 定価1512円(税込) 小学館

どうやったらジャンケンが強くなれるのだろうか？ ジャンケンに負けてばかりのショウタ、ジャンケンが強くなりたいアイコたち4人は、ジャンケンがめっぽう強い「ジャンケンの神さま」と言われるおじいさんに弟子入りをすることにした。しかし何をするのかと思えば、掃除をするだけ。



こんなんでも本当に強くなれるのか？

早く教えて欲しいと文句を言うアイコたちに、「もう教えておるぞ。掃除をすることもジャンケンの基本じゃ」と、おじいさんは、何食わぬ顔で言う。そこへ、ジャンケンの全米チャンピオン、アンドレ・ボッチが挑戦にやってきた。しかし、ジャンケン対決の前に、神さまが交通事故で入院してしまった。そこで神さまの代わりにアイコがアンドレと対決することに。病室で、神さまの特訓がはじまった。ジャンケンが強くなる方法とは何か？

世界の注目するジャンケン対決の結末はいかに？ 思わず笑ってしまう楽しさとスリル満点のスーパーエンターテインメント。

【小学生・中学生の部共通】



図書名 幽霊ランナー

岡田 潤 著 定価 1404円(税込) 金の星社

接触転倒のトラウマから、マラソン大会を3年連続棄権している優。普段から影も薄く、みんなから幽霊ランナーと呼ばれています。しかし、3回目の大会翌日から優は変わった。人知れずグランドに現れる中学生先輩ランナーの指導を受け、地道な走り込みを続けるとともに、本格的な走法を身につけていきます。そして、プレッシャーに襲われる中、いよいよ4回目のマラソン大会が…。

優に走る意味を教えてくれた先輩は誰なのか？大会が終わった後、ラストに真実がわかります。

思い通りにならないつらさと悲しみ／周囲の声に負けず、継続することの大切さ／ベストを尽くし最後まであきらめない気持ち／応援してくれる友だちや家族の温かさと、読む人にさまざまな感動を届ける、少年の成長物語。

「走れ、自分らしく」優を応援する気持ちから、やる気と力が湧いてくるスポーツ&ファンタジーです。



図書名 坂の上の図書館

池田 ゆみる 著 定価 1404円(税込) さえら書房

「この本借りたい人?」「はい!」とわたしは、思わず手をあげた。自分でも驚くほど大きな声で。このときわたしは、生まれてはじめて図書館で本を借りた。

——小学校五年生の春奈が暮らすことになったのは、自立支援センター「あけぼの住宅」。ここでは、住む家のない母親と子どもが少しのあいだ暮らせる。あけぼの住宅のとなりには市民図書館があり、春奈は、生まれてはじめて図書館に入った。友人や図書館司書、本との出会いが、春奈を少しずつ変えていく。そして、春奈が見つけた夢とは……

はじめて本に出会ったあの日——夢中になってページをめくったこと、ストーリーにドキドキしたこと、勇気もらったこと。そんな本との出会いを思い出させてくれます。図書館司書であった著者が、自らの経験をもとに、本の持つ力をやさしく描きあげました。



図書名 ぼくらは壁を飛びこえて

シンシア・レヴィンソン 著 定価1728円(税込) 文溪堂

「シルク・ドゥ・ソレイユ」などの活躍により、今や世界的な人気を誇るエンターテインメントとして認められたサーカス。本書は、アメリカのセントルイスにあるセントルイス・アーチズと、イスラエル北部のガリラヤ地方にあるガリラヤ・サーカスを舞台に、黒人、白人、ユダヤ人、アラブ人…普通は接触する機会のない社会階層や、対立する民族の子どもたちが、サーカスの活動を通して、お互いの違いを認めながらも、協力し、様々な「壁」を乗り越え成長していく過程を描いた感動のノンフィクション。「自分たちの考え」を基準に相手を判断し、「違い」を認めない頑なな態度から紛争が起こっている今こそ、このしなやかで強かな若者たちの話を、日本の子どもたちに読んで欲しいと思います。なお、著者は、2つのサーカスの中でも9人の団員に焦点をあて、2005年～2014年まで10年の長きにわたる徹底的な取材と客観的な描写でこのノンフィクションを書き上げました。



図書名 月はぼくらの宇宙港

佐伯 和人 著 定価1620円(税込) 新日本出版社

いま月は、人類が太陽系へフロンティアをひろげるための宇宙港として、注目を集めはじめています。各国、そして日本でもと、計画の公式発表が目白押しです。そんな「熱い」月を大解剖。近年の月探査によってわかってきた、最新の月科学を紹介し、人類と月の新しい関わり方をしめします。著者の専門は地質学。月がどういうものでできているかを調べ、果ては月の素材を材料として宇宙基地、宇宙探査へという提起。月に基地を作るなら地球から運ぶより現地調達が手取り早いのです。その月面基地は本のカバー絵に描かれています。著者

のこだわりで、ここから内容が始まっています。レトロモダンな絵で、子どもたちに親しまれる未来を感じさせる味のあるものに仕上げてもらいました。子どもたちの宇宙開発未来図を月へ、太陽系へと広げ、将来の宇宙への関心を大きく伸ばし宇宙を身近に感じられる本です。

【中学生の部】



図書名 100年後の水を守る

橋本 淳司 著 定価1512円(税込) 文研出版

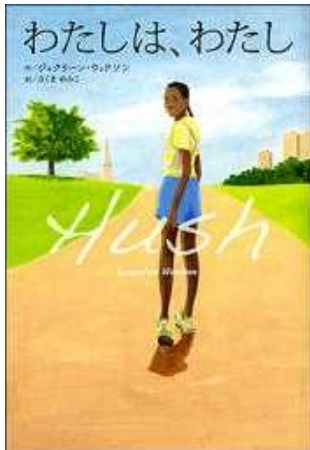
この作品は、著者が1990年代後半に取材で訪れたバングラデシュで目の当たりにした、とある町の共用井戸の衝撃的な実態からはじまります。その井戸から出る水は、ヒ素に汚染をされていたのです。しかも、その地域の子どもたちは、無邪気にその水を飲料として飲んでいました。このことは、水ジャーナリストとして活動をしてきた著者にとって、驚くべき事実でした。水不足は、アジアやアフリカの問題で、自分には関係ないと思っている人がまだ多くいますが、そんなことはありません。一人一人が自分たちの水を末ながく使っていくには、どうしたらよいかを考える時期にきていると、著者は訴えています。「水」を通じて、日本だけでなく世界各国に目を向け、水にまつわるこれまでの歴史や今現在のくらしと水の問題、水に関するこれからの取り組みの提案について、子どもたちに向けてメッセージを送ったノンフィクション作品です。



図書名 いい人ランキング

吉野 万里子 著 定価 1512円(税込) あすなろ書房

中学校生活をおくるのが不器用な子にエールをおくる、ちょっとビターな青春小説です。
木佐貫桃は中学2年。母の再婚によって、2学期から名字が変わりました。本人にとってはどぎまぎするできごとですが、クラスメイトには、違和感があるのは最初だけ、慣れれば別にどうということのない小さな変化だとばかり思っていました。でも、9月の終わりの文化祭で、開催する予定だったミスコンを職員会議で禁止されたことから、2年1組は「いい人ランキング」といういい人を選ぶコンテストを行うこととなります。木佐貫桃が第1位になり、そこからクラスの空気が変わりはじめます。小さなきっかけが、さまざまな連鎖を引き起こし、少女が追いつめられていく過程、そして、友人と妹の協力によって意外なところから、その状況を打破していく姿が、いきいきと描かれています。



図書名 わたしは、わたし

ジャクリーン・ウッドソン 著 定価1512円(税込) 鈴木出版

主人公トスウィアの父は誠実な警察官です。同僚の白人警察官が黒人の少年を射殺する事件を目撃してしまい、法廷で真実を証言しました。そのことで裏切り者と見なされ、家族にも危害が及ぶようになります。そこで、法廷で重大な証言をした人が、危害を加えられたり殺されたりしないように保護する「証人保護プログラム」によって、一家は別人として別の場所で暮らすことになりました。家族はそれぞれ、アイデンティティーの喪失と二度と会えない友人や失ったものへの想いに苦しめられます。父は生きる意欲を失い、母は宗教に救いを求め、

主人公と姉は不安に押しつぶされそうな毎日を送っていました。そんなある日、走る喜びを思い出した主人公は、見失いそうになっていた自分を取り戻し、力強く進み始めます。

この本の作者ジャクリーン・ウッドソンは、2018年2月、アメリカ児童文学の功労者に贈られる「ローラ・インガルス・ワイルダー賞」を受賞しました。